

# 新出の女子用往来物『女用玉章袋』

高 城 弘 一

総合教育非常勤講師

## はじめに

「往来」とは、「消息往来」の意味で、平安時代後期から明治時代初期にかけて広く使われた。また往来は、本来手紙文の模範文例であったものの、後には、平安朝貴族の社会的内容や上流武家の日常生活に関する内容のものも含むようになる。江戸時代に入ると、教育用として重要な書籍の一部となり、寺子屋の普及や木版印刷技術の発達につれて、女子教訓物なども作られ、多種多様な往来物が板行された。

このように、女子教育や女性の教養・生活などに必須な女子用往来物の出版点数は、吉海直人氏の「女子用往来としての百人一首」（『江戸時代女性生活研究』、江森一郎氏監修『江戸時代女性生活絵図大事典』別巻、平成6年6月、大空社）によると、『百人一首』だけでも、実に979点も確認され、膨大な数の女子用往来物が流布したことを物語るといえまいか。また、吉海氏の「女子用往来としての百人一首」によると、その最も急激な増加時期は、宝暦・明和頃で、女子用往来としての『百人一首』の確立期とみられている。このように、江戸期の『百人一首』の刊行も、女子教育や女性の教養などに不可欠なものであったといえよう。

また、往来物研究の第一人者である小泉吉永氏は『女子用往来刊本総目録』をご自身のホームページ ([http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a\\_r/B20.htm](http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a_r/B20.htm)) で公開されている。

この『女子用往来刊本総目録』（平成8年2月）の序文 ([http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a\\_r/B21.htm](http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a_r/B21.htm)) によれば、「半世紀ぶりの女子用往来目録」「『百人一首』を含む初の目録」と副題を付し、

『江戸時代女性生活研究』（中略）所収の「女子用往来総目録」を大幅に改訂し、さらに刊年別一覧を増補したものである。参照・引用文献150点、原本調査延べ2,550件をもとに合計3,050種以上の板種について記載しており、また、研究者、図書館員、さらに古書店から蒐集家まで多くの方々に活用して頂けるように編集したつもりである。調査・研究にいささかでも寄与できれば幸いである。

と、膨大な数の女子用往来の最新情報を提供して下さるものであるが、別途、以下のような注記も有する。

本目録は、小泉吉永編集・吉海直人校訂『女子用往来刊本総目録』（1996年、大空社刊）のデータに若干の訂正を加えたものです。従って、原本とは一部異なる箇所があります。また、本ホームページ別項の「女筆手本類解題」とも異同がありますが、多くの場合「女筆手本類解題」のデータの方がより正確です。

近時落手した『女用玉章袋』【図1参照】は、このホームページ版『女子用往来刊本総目録』にも採られておらず、国文学研究資料館電子資料館において公開されている『日本古典籍総合目録』（<http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>）でも確認することはできない。この『日本古典籍総合目録』とは、以下のような凡例があるので、参考までに掲げておきたい。

このデータベースは、日本の古典籍の総合目録です（一部、漢籍・明治本を含みます）。『国書総目録』（岩波書店刊）の継承・発展を目指して構築した、いわば「新国書総目録」ともいうべきもので、古典籍の書誌・所在情報を著作及び著者の典拠情報とともに提供します。

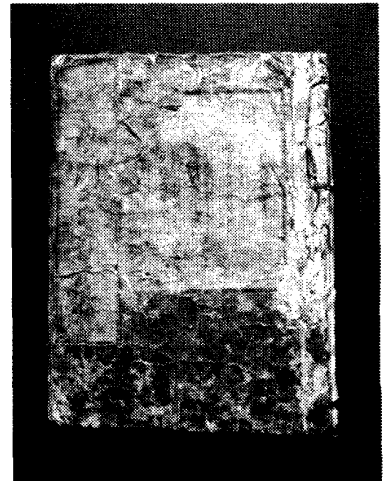


図1

また、

典拠情報は、『国書総目録』（補訂版 1989-1991）、『古典籍総合目録』所収のすべての著作・著者、及び、これらの目録刊行後に追加した著作・著者を収録しています。

とのことである。ともあれ、『女用玉章袋』は従来その存在が知られていなかった女子用往来物で、新出の一本として注目できよう。

本稿では、この『女用玉章袋』を資料として紹介し、特に小式部内侍の故事には若干の考察を加えたいと思う。

#### 1. 『女用玉章袋』とは

『女用玉章袋』の「玉章」とは、『大辞泉』（松村明氏監修、小学館『大辞泉』編集部、小学館、平成7年12月）によると以下のようになっている。

たまづさ〔たまづさ〕【玉\*梓／玉<sup>▽</sup>章】

《「たまあずさ」の音変化。4が原義》

- 1 手紙。消息。
- 2 巻いた手紙の中ほどをひねり結んだもの。ひねり文。結び文。多く艶書(えんしょ)にいう。
- 3 《種子の形が結び文に似ているところから》カラスウリの別名。

4 《古く便りを伝える使者は梓(あずさ)の杖を持っていたところから》使者。使い。

『女用玉章袋』の場合、広義の「手紙・消息」とみてよいであろう。

小泉氏『女子用往来刊本総目録』所収「刊年別一覧」を元に、同所収「女子用往来の部」も参照しながら、「玉章」を含む女子用往来を以下に挙げてみたい。

- 明和元年 『女要千代玉章』  
 明和5年 『采女玉章』、『女文硯四季玉章』  
 寛政5年後 『女用年中往来艶玉章』(じょようねんちゅうおうらいやさたまずさ)  
 \*寛政5 『百人一首』広告中に「近刻」とあり  
 天保14年 『女宝女今川教玉章女童教訓』  
 弘化頃(1844~1847) 『女宝女今川教玉章女童教訓』  
 江戸後期 『女宝女今川教玉章女童教訓』、『百人一首女玉章』  
 明治7年 『〈女童脩身〉教の玉章』  
 明治23年(1890) 『婦女の玉章』

このように、前述の膨大な女子往来物からしたらごく一部かもしれないが、同名異年板行を含めて10件ほど確認することができる。

『女用玉章袋』は、刊記(墨・朱・黄の多色刷り)【図2参照】によると、寛政三辛亥年新刻／御江戸山下御門外山下町／伊勢屋治助／東都書肆 同所／多喜屋金治／合板となっている。

小泉氏の『女子用往来刊本総目録』所収「刊行別一覧」では、「◇は百人一首以外の女子用往来、◆以下は百人一首を示す。また、元号に対応する西暦は改元の前年までとした。」という注記の下、古くは慶長(1596~1614)から始まり、明治時代(1868~1911)に至るまで、整然と書名が埋め尽くされている。



図2

その中でも、寛政3年(1791)刊行の女子用往来を以下に引用する。

- ◇女教訓百ヶ条／女孝経／女文台智恵鑑／女重宝・百人一首・今川女文宝千代珠／婦人宝箱  
 女用文千歳姫松／仮名附消息并ちらし書かな手本／百瀬四季女文章／長雄女年中用文  
 ◆女文宝智恵鑑四季用文章入・女今川躰方入／撰要百人一首操鑑／万寿百人一首錦箱／女教訓身持艸万世百人一首花文台／百人一首・女文章操大全玉文庫／操百人一首色紙箱

このように、寛政3年という年は、江戸中期においてはかなり板行の種類が多いのが特徴である。『女用玉章袋』は、ここの◇に増補されるべき一本と認定するものなのである。

本書『女用玉章袋』の表紙はずいぶん傷んでいるが、貼付の題簽は「○ 女用玉章袋」(○は判読不可。篆書一字に○囲み)と判読できる。また、目録が貼付されており、以下のようである。

目録  
小式部内侍歌  
曲水宴  
女諸禮躰方  
七夕歌盡  
農業圖 (振り仮名による)  
四季文  
五節句文  
三十六歌仙  
女今川  
折方圖

また、表紙裏【図3参照】には、墨・朱・黄の多色刷りで、

目録  
小式部内侍名歌  
曲水宴  
女諸禮躰方  
七夕歌盡  
農業圖  
三十六歌仙  
女今川  
折方圖  
四季文  
五節句文



図3

となっているので、表紙中の題簽や目録 (いずれも貼付) は、発刊当事の元のままであったものと推察できよう。

ここで、『女用玉章袋』の書誌を記しておきたい。料紙は、楮紙。本紙は二つ折りの袋綴じである。寸法は、タテ 21.5×ヨコ 10.5 センチメートル。本文は、28 丁。洋装本の数え方でいう 56 頁という構成になっている。

『女用玉章袋』の仮名遣い表記であるが、表紙はもとより文中にもその表記は見られないが、「をんな (じよ) ようたまづさぶくろ」となろうか。今日的な読みでは「おんな (じよ) ようたまづさぶくろ」であろう。

## 2. 「小式部内侍歌」

まず 1 丁表 (洋装本の 1 頁) に、小式部内侍を中心に配した絵・詞【図3参照】がある。この

面も、表紙裏目録同様、墨・朱・黄の多色刷りである。表紙の目録では「小式部内侍歌」、表紙裏の目録では「小式部内侍名歌」となっており、「名」の有無ではあるが、若干の異同が見られる。

上部の本文を翻刻すると、以下ようになる（●は判読不可。読み仮名は省略）。

小式部内侍  
 君御寵愛の  
 まつかれければ  
 ことはりや  
     枯てはいかに  
     姫小松  
 千代をば  
     君に  
 ゆづると  
     おもへば  
 かく詠奉りければ  
 この松みどりを生じ  
 ●●●どくかへけり

この歌は、『女用玉章袋』において小式部内侍の名歌（表紙裏目録）としているが、『新編国歌大観』に収録されるような、主たる歌集にはまったく見られない。

東北大学附属大学図書館平成12年度企画展にて、狩野文庫の『蘭奢待』が展示された。その展示資料一覧の解説（<http://www.library.tohoku.ac.jp/main/exhibit/sp/siryoku12.html>）によると、以下のとおりである。

『蘭奢待』は、「らんじゃたい」といい、宝暦14年（1764）刊行、月岡丹下昌信画、江戸吉文字屋次郎兵衛・大坂吉文字屋市兵衛板行の2巻2冊の墨摺絵本で、『絵本深見草』ともいうものである。

『蘭奢待』の序に、「古今の序に天地を動し 目に見ぬ鬼神をも哀れと思はせ 男女の中をも和らげ たけきもののふの心をもなぐさむるを 歌の徳なり」を有し、和歌に因んだ故事を描いた絵本であるという。まさに、数々の故事が伝えられている小式部内侍の部分では、天皇が大事にしていた小松が急に枯れだしたのを惜しんで内侍に歌をよませたところ、松が緑を取り戻したという故事を描いた箇所があるという。また、その歌は、「ことはりや 枯れてハ いかに姫小松 千代をば君に ゆづれとおもへば」ということである。

まさに、『女用玉章袋』の「小式部内侍の図」およびその所収歌と同様ではあるまいか。

一方、岐阜大学図書館では、HPに「刊行物／活動」として、同館蔵の奈良絵本『小しきふ』（上・下）を電子画像資料として公開されている。この『小しきふ』下にも、同様な故事の箇所を有する。解題執筆者の弓削繁氏によると、

問題の『小式部』であるが、この作品は（1）の公家物の中でも、歌人伝説物もしくは歌徳

物に分類される佳作である。次に梗概を掲げる。中頃中宮彰子のもとに紫式部という才色兼備の女房があった。ある夜不思議な夢をみて懐妊、美しい女兒を産んだ。その子は幼い時から和歌に秀でていた。母の式部はやがて石山寺に籠もって『源氏物語』六十巻をものするが、幼子はその間継母の手に委ねられた。十三の春には、鬼神に魅入られて瀕死の重病に罹るが、歌が鬼神を感動させて事なきを得た。こうして、この娘も彰子の目にとまり、和泉式部としてお仕えした。その頃、都には夜毎酒呑童子という鬼が出て人を奪った。勅命を受けた頼光・保昌は住吉明神の加護もあって見事に鬼を退治、保昌はその勲功に和泉式部と結ばれた。和泉式部は歌の名人道命法師と浮名を流すが、母式部は『伊勢物語』の業平の故事等を引いて論じた。また、赤染衛門はうらぶれた和泉式部を歌で訪った。式部は巫女に伴われて出雲社に赴き、神前で霓裳羽衣の舞を舞い保昌との関係を回復することができた。十七の春、女兒を産むが、宮仕えの身を憚り、東寺の門前に捨子する。女兒は清水寺に子授け祈願にやってきた河内国の老夫婦に拾われ、大切に養育される。和歌・連歌に秀でた孝行娘であった。時は流れて、行末に不安を抱く年になった式部は、我が子を探す旅に出る。長谷寺で祈願した式部は、河内国の奥山に迷い入るが、偶然にも一夜の宿を請うた草庵で娘との再会を果たす。こうして都に上った娘は、住吉行幸の場で見事な歌を詠んで人々を感嘆させ、小式部の内侍として召されることになる。帝の愛する小松が枯れたのを蘇らせたのも他ならぬ小式部の名歌であった。しかく歌の道は嗜むべきであるという。

以上、この物語は上の梗概からも知られるとおり、紫式部・和泉式部・小式部という著名な三才媛を親・子・孫の三代の系譜に位置づける興味深い作品であるが、そこには歌徳を軸に、夢想懐妊譚・『源氏物語』執筆譚・継子譚・鬼神感应譚・酒呑童子譚・道命譚・女庭訓・捨子譚・大江山説話など実に多彩な説話や伝承が綴り合わされている。この贅沢な趣向に、王朝の世界に憧れを抱く当時のとりわけ若い女性たちが、どれほど心をときめかせたかは想像に難くない。

また、同じく弓削氏によると、『小式部』の伝本は、現在次の五本が知られているとのことである。

- (一) 天理図書館蔵本（藤井乙男氏旧蔵本。挿絵なし写本。『近古小説新纂』『室町時代物語大成 五』所収）
- (二) 岐阜大学附属図書館蔵本（反町茂雄氏旧蔵本。奈良絵本）。
- (三) 小野幸氏蔵本（前田善子氏旧蔵本。奈良絵本。但し挿絵を欠く。『大成 補遺一』所収）。
- (四) 戸川濱男氏旧蔵本（卷子本。内題『いつみしきふの物かたり』。『小式部』の下巻に相当。挿絵なし。『大成 二』所収）。
- (五) 赤木文庫旧蔵本（奈良絵本。下巻欠）。

結果からすると、岐阜大学附属図書館蔵本（本書）は、奈良絵本系の唯一の完本であり（小野本は挿絵を欠き、戸川本は下巻、赤木本は上巻のみの零本である）、貴重な本文ということができるとのことである。

少々長くなるが、ここでは、『小しきふ』下における、件の小式部内侍の故事前後の翻刻と「漢字かなまじり表記」での部分を引用する (<http://www1.gifu-u.ac.jp/~gulib/koshiki/koshige.html>)。

十三の年、内侍のせんじをか  
うぶりけり。其後いづみ式部、  
くぜのとへまいりたきよし申  
ければ、日数の御いとまを  
たまはり、かのくぜのとへまいり  
て、みだうのやうをおがみ、この  
だうのひかりにあたりたらんもの、  
後の世のやみにまよふべからず  
ときゝて、やがて我がぎやくしゆ  
のせきたうをたて、地どもを  
よせければ、いまゝでもその  
つとめをこたらず。しかるに、み  
かどの御てうあひの小松には  
かにかれけるを、なのめならず

(22丁裏)

御をしみあつて、「神も草  
木も歌のみちになびくなり。  
いづみしきぶいそぎてめしの  
ぼせて、松のいのりに歌をよ  
ませよ」とのせんじなりけれ  
ば、こしきぶのないし、「丹後ま  
でははるかのみちなり。まづ  
みづからよみてまいらすべき」  
よしそうもんす。「いそぎくいそぎ」  
よみてみよ」とのせんじなり  
ければ、小式部の内侍、ゐんざ  
むして、此松をめぐりけり。

ことはりやかれては  
いかに姫小松

(23丁表)

千世をば君に  
ゆづると  
おもへば

十三の年、内侍の宣旨を蒙  
りけり。其後和泉式部、  
久世の戸へ参りたきよし申し  
ければ、日数の御暇を  
賜はり、かの久世の戸へ参り  
て、御堂の様を拝み、この  
堂の光にあたりたらんもの、  
後の世の闇に迷ふべからず  
と聞きて、やがて我が逆修  
の石塔を建て、地どもを  
寄せければ、今までもその  
勤め怠らず。しかるに、御  
門の御寵愛の小松俄  
に枯れけるを、なのめならず

御惜しみあつて、「神も草  
木も歌の道に靡くなり。  
和泉式部急ぎて召し上  
せて、松の祈りに歌を詠  
ませよ」との宣旨なりけれ  
ば、小式部の内侍、「丹後ま  
では遙かの道なり。まづ  
自ら詠みて参らすべき」  
よし奏聞す。「急ぎ急ぎ  
詠みてみよ」との宣旨なり  
ければ、小式部の内侍、院参  
して、此松を巡りけり。

理や枯れては  
いかに姫小松

千世をば君に  
譲ると  
思へば

かやうにゑいじければ、此まつ  
しきりにうごきて、やがて時の  
まにさかへてありければ、ぎ  
よかんなのめならず。しきくしき>  
の御けしきたまはりけり。ある  
人ざんし申ていはく、「此うたは、  
たんどよりきのふ人のゝぼりた  
りときこゆ。いづみしきぶがよみ  
てのぼせたり」と申。そのよし御  
たづねありければ、「こんにち夜  
に入て、たんど母のかたより

(23丁裏)

いろ<いろ>の物のぼせられけれ  
ども、いそぎのめしにしたがひ  
て、ふみどもを見ず」と申て、

大江山いくのゝ  
みちの  
とをければ  
まだ文も  
みずあまの  
はしだて

とゑいじければ、ぎよかんあ  
りて、さては人をつかはさせ  
給ひて見せられければ、いづみ  
しきぶはあまのはしだてに  
歌をよみてこめけり。

(24丁表)

よさの海や  
月すみ  
わたる  
うら風に雲も  
かはらぬ  
あまの  
はしだて

かやうにゑいじて、もんじゆに  
たむけたてまつり、やがて都へ

かやうに詠じければ、此松  
頻りに動きて、やがて時の  
間に榮えてありければ、御  
感なのめならず。色々  
の御気色賜はりけり。或る  
人讒し申して曰く、「此歌は、  
丹後より昨日人の上りた  
りと聞こゆ。和泉式部が詠み  
て上せたり」と申す。そのよし御  
尋ねありければ、「今日夜  
に入りて、丹後母の方より

色々の物上せられけれ  
ども、急ぎの召しに随ひ  
て、文どもを見ず」と申して、

大江山生野の  
道の  
遠ければ  
まだ文も  
見ず天の  
橋立

と詠じければ、御感有  
りて、さては人を遣させ  
給ひて見せられければ、和泉  
式部は天の橋立に  
歌を詠みて籠めけり。

与謝の海や  
月澄み  
渡る  
浦風に雲も  
変らぬ  
天の  
橋立

かやうに詠じて、文殊に  
手向け奉り、やがて都へ



のぼりて、とみさかへて、ゑい  
 ぐはにほこる事かぎりなし。さ  
 ればいかにも歌のみちを  
 たしなむべきなりと申ける。め  
 でかりし事どもなり。

上りて、富み栄えて、栄  
 花に誇る事限りなし。さ  
 ればいかにも歌の道を  
 嗜むべきなりと申しける。め  
 でたかりし事どもなり。

(24丁裏)

これもまた、『女用玉章袋』の小式部内侍の故事と同様である。『百人一首』でも膾炙する、小式部内侍詠「大江山」の名歌との前後関係が判然として、たいへん興味深いものではないか。

以上のように、『女用玉章袋』の「小式部内侍の図」は、直接か間接かは不明ながらも、奈良絵本『小しきふ』や『蘭奢待』などの歌徳物作品の影響を受けたものといえることができよう。一面にこれが配されたのは、女子のあるべきもの、すなわち必須の教養として、歌道の重要性を浸透させる意図があったものと推察できよう。

他の女子往来物にも、この小式部内侍の故事が収録されているか否かは、少なくともホームページ版『女子用往来刊本総目録』を検する限り、所収するものはない。寡聞にして不明である。

### 3. その他の内容

ここでは、小式部内侍の故事以外の項目を簡単に見ていくこととする。

まず、「曲水宴」【図4参照】が、1丁裏、2丁表（洋装本の2頁、3頁）見開きに収録される。「曲水宴」の起こり・由来が絵とともに簡略に記される。

次に、「七夕歌盡」【図5参照】が、2丁裏、3丁表（洋装本の4頁、5頁）見開き上部に、「七夕の歌」として15首収録される。

同様に、「農業圖」が、2丁裏、3丁表（洋装本の4頁、5頁）見開き中央部に、「女諸禮しつけ方」（「女諸禮躰方」）が、「じぎの仕やう」（「辞儀の仕様」）から始まり、同見開きの下部に配される。

次に、「三十六歌仙」【図6参照】が、3丁裏から12丁表まで（洋装本の6頁～23頁）上部に収録され

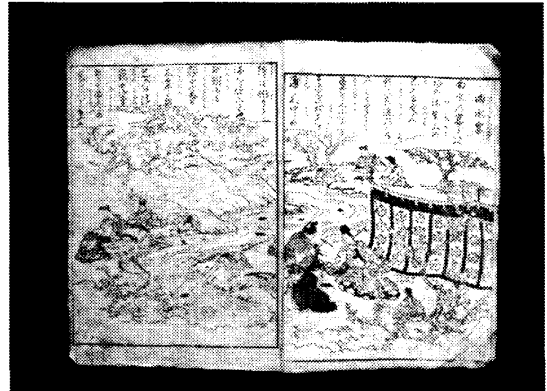


図4

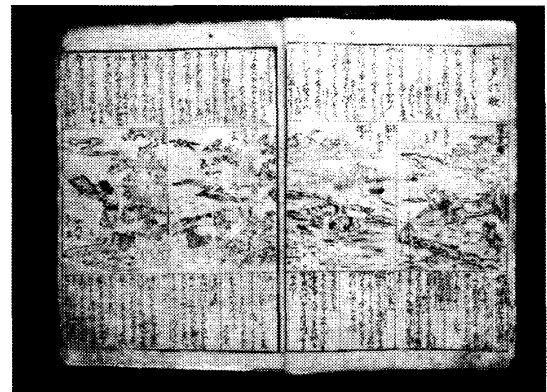


図5

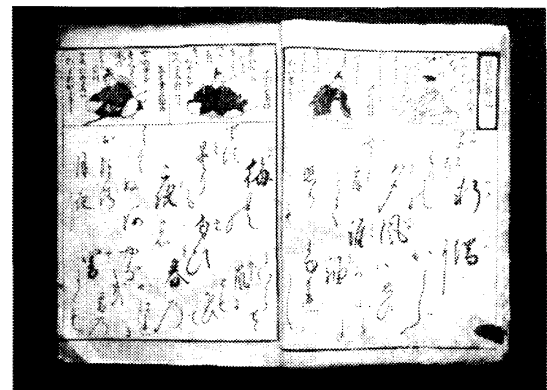


図6

る。通例の「三十六歌仙」同様、柿本人丸から始まる。各歌に詠者の絵入りである。

また、「四季の文」【図6参照】が、3丁裏から19丁表まで（洋装本の6頁～37頁）の中心に、挿絵とともに配される。散らし書きの事例と行書きの事例が混在し、本書の中核をなすものである。

「女今川」【図7参照】が、12丁裏から28丁表途中まで（洋装本の24頁～55頁途中）上部に収録される。挿絵から始まる。

「五節句の文」【図8・9参照】が、19丁表から28丁裏途中まで（洋装本の24頁～55頁途中）上部に収録される。挿絵が何点か含まれる。

「折方圖」【図10・2参照】が、28丁裏途中、28丁裏（洋装本の55頁途中、56頁）上部に収録される。「たんざく」（「短冊」）・「しきし」（「色紙」）・「あふぎ」（「扇」）から「水引」まで、都合10件の形を載せている。

以上のように、表紙および表紙裏の目録同様の内容を有しているといえよう。これらを大きく分類すると、歌道に関する項目が多いものの、礼儀作法・手紙文の模範文例もあり、女子教育には不可欠な要素を、必要最小限に取り込んでいるものと思われる。

### おわりに

本稿では、新出の女子往来物『女用玉章袋』を資料として紹介できた。特に小式部内侍の故事には若干の論考を加え、『女用玉章袋』は奈良絵本『小しきふ』や『蘭奢待』などの影響を受けたものという推論を出すにいたった。第一面にこれが配されたのは、女子の必須の教養として、歌道の重要性を認識させる意図があったものであろう。歌道関連の項目は、他にも複数存在し、その他の項目としては、礼儀作法および手紙文の模範文例を収録している。本書『女用玉章袋』では、これらが三本の柱になっている。このように、『女用玉章袋』は、女子教育には不可欠な要素を無難に収録している、女子用往来物の一本



図7

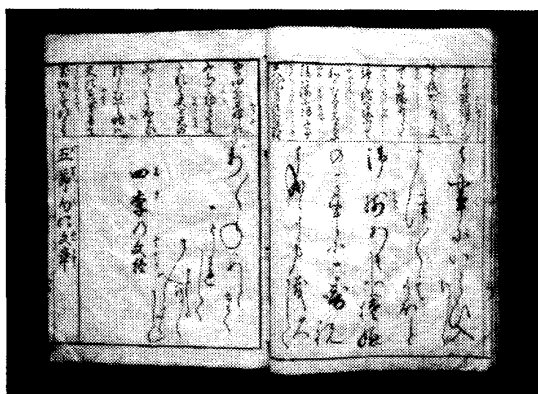


図8



図9



図10

ということが出来る。

今回の事例は、わずか二百数十年前の板行にも関わらず、従来その存在が確認されなかったものである。まだまだ未発見の往来物があるのに違いなく、今後の落穂拾いも重要なことではあるまいか。

稿者は、往来物関係においてはまったくの門外漢ではあるが、今般、このような形で、『女用玉章袋』を紹介する機会を得たことは意義なしとしない。

最後になったが、ホームページにおいて諸資料を公開くださっている個人や機関の方々に深甚なる感謝の意を表する次第である。